【Too Late Springs=!】捨て台詞のためのメソッド

サカモト　エリ

男１　男（２８歳）
男２　男（２８歳男。１との接点はない）
男３　男１の知人

（男１、男３に連れられてやってくる、男３は４５リットルくらいのゴミ袋を持っている。男１の頬はこけていて、覇気もなく汚そうである。男１は人生の再出発をしようとしている。男１は、バス停にたどり着くまでにいろいろなものを捨てる、着ている服や、ズボン、今日は日差しもそんなにきつくない、被っている帽子も男３に渡した。男３のゴミ袋には男１が捨ててきたであろう、品々でいっぱいである）

男３　しばらくは一人にしているといい。じきにバスが来る。
男１　……、
（男１、バス停までたどり着くことが出来た、男１は、着ていった服や、帽子や、ズボン、時計、それらは、もう男１には不要である。最後に男１は、長年、履きつぶした靴を脱いだ、靴下も脱いだ。男１．黙って男３に履きつぶした靴を差し出す）
男１　……、
男３　これもか。

（男３．持っているゴミ袋に男１の靴と靴下を入れる）
男３　これで、もういいか。
男１　……（頷く）
男３　いいんだな、
（男１、考えこみ、シャツとパンツいっちょなのに、がさがさとシャツ、パンツを探る。パンツの中から、チューリップが一本出てくる）
男３　……。
（男１、しばらくチューリップを見つめる。）
男３　……。
（男１、一本残ったチューリップを断腸の思いで捨てようとする。……、だが、捨てられない。捨てようとする、……、だが、捨てられない）
男３　もう、いい。
男１　……、
男３　それだけは取っておけ。
男１　……（深く頷く）
男３　もういいな、
男１　……（深く頷く）

（男３、男１をバス停に残すと帰っていく）
（以下、男１の今までを全てを捨てようとした男１の捨て台詞である）

（間）

男１　傷つくふりにも飽きました、僕は平気です。
ただ、僕が愛した女はあばずれだった、それだけのことです。僕は、無邪気なあの子は、僕のためにうまれてきてくれたんだね、って心底思っておりました。
黒髪や、くりくりのおめめ、陶器のような白い肌、小さな鼻や、赤くて小さな唇、それはもう、僕と重ねるための唇だと思っておりましたんです。甘えてくっついてくる様、かわいいじゃありませんか、勉学に勤しむ真剣なさま、美しいじゃありませんか、どうにもこうにもまぶしいのです、食事をとるさま小さな口にいっぱいほうばっているのです、なにをそんなに含んでるんだいって、艶っぽいじゃありませんか、何をそんなに含んでいるんだいってね。また、白魚のような手をそっと包むのは僕だけだと思っておりました。ひゃっこい手を包むのですよ、僕のこの華奢な手で。「ごめんね、ぼくの手が冷たくて」なんて言うと「ううん、しばらくこうしていれば温かくなるわ」というんです、かわいいじゃありませんか、僕は、あんな柔らかなすべすべな手をほかにしりませんでした。愛らしい女なのです、僕はあの女が何をしても守ってやろうと思いましたよ、ええ、あの女ほど愛おしく思える女はいませんからねぇ。

（男２、うすらうすらと歩きながらバス停にやってくる。男２、裸同然の怪しい男１に不審に思いながらも、礼儀正しく男１に話しかける）

男２　ここいいですか、
男１　……女の手は小さい、守ってやらねばねぇ。
男２　……はぁ、ここ、いいですか。
男１　守れるだけの男でないと、女はよりつかん。
男２　はぁ、ここいいですかね。いいですね、
男１　女を守れるだけの男ねぇ。いったいどんな男なんだってねぇ。守ってやらねばならんのです。
男２　どうも。
（男２、文庫本を開く）
男１　すべすべな頬に口づけたり、これまた小さな耳をこそばせたりと、そうこうしていると赤らむ頬の具合といっちゃあ、なんだろうね。魔法のようだ。いや、僕は魔法はつかえないのだがね、現にあの女を抱いているのだし、女の中も知っている。あれは温かいね。あぁ、温かいね。

男２　……。
男１　女の肌というのは不思議だね。手はひゃっこいのに、胸は温かい。中も温かい。どの女もそうかどうかは、分からないが、僕のあの子は、そうだった。
男２　……。
男１　なんだって、あんなにかわいらしいのかねぇ。あんなにいい香りがするのかねぇ。
（男１、パンツから取り出したチューリップを嗅ぐ）

（男２、男１の様子を見て、この男（男１）は、とてつもなく怪しい、関わらないようにしようと思い、じっと見る。じっと見る。じっと見ていると、どうも、自分（男２）と顔つきや、体つきが似ていることに気づく）

男２　……！！（怪しい、怪しすぎる、むしろこわい。絶対関わるのはやめよう。怪しい、自分と同じような風貌の男にはかかわらないようにしよう）
男１　あやしいねぇ、あやしい、って、さっきからなんなんですか、あなた。
男２　……（え、私のこと？まさかね、この男はちょっととちくるっているから、おおよそ、独り言を言っているのだろう）というイメージで男１の発言を無視する。
男１　あやしいあやしいって、なんなんですか、あなたは。
男２　……（あ、なんか話しかけられている、無視しよう）
男１　ねぇ、なんなんですか、あなたは。
男２　……（無視しよう）
男１　あなたですよ、あなた。
男２　……。
男１　（男２のすぐ横まできて）あ・な・たはなんなんですか。
男２　……え、私ですか。
男１　他に誰が居るというんです、ここには、僕とあなたしかいませんが。
男２　（わ、会話できるんだ。どうしよう絡まれたくない）
男１　あなたは、だれなんですか。
男２　わ、わたしですか。
男１　そうです。
男２　いえ、誰なんですか、って、ねぇ。（あぁ、絡まれてしまっては仕方が無い。こちらから宣戦布告だ。）こういってはあれですが、僕とあなたは似ていると思います。
男１　え、僕にですか、
（男１、男２の顔をまじまじと見る）
男２　あんまり見ないでくださいよ、ね、見ないで。
男１　うーん、似ている、かもしれない。
男２　で、でしょう。

男１　ほくろの位置が違うけど、鼻の高さも違うけど、顔のつくりは似ているかもしれない。けど、雰囲気は違う。
男２　えぇ、じゃあ、僕はこれで。
（男２、文庫本に顔をうずめようとする）
男１　（間髪いれずに）あなたは、いくつですか、僕は２８です。
男２　え、（さも、嘘だろう、もっと上だろうだって老けているじゃないかという）
男１　……、ごめんなさい、本当なんです、昭和６３年うまれです。
男２　着ている物とかは……、
男１　捨ててきました。
男２　え、はぁ。（捨ててきた？）
男１　あなたはおいくつなんですか。
男２　え、私も２８歳です。
男１　え、嘘でしょう。（いやいや、お前も老け込んでいるな、白髪交じりじゃないか、人のことといえないだろう）
男２　……、いや、ごめんなさい。嘘ではありません。いろいろありまして、こういった有様です。
男１　はぁ。
男２　なんですかね、
男１　いやぁ、ごめんね。急に絡んじゃって。
男２　いえ、こちらこそ。
（間）
男２　（本に顔をうずめる作戦にも失敗し、沈黙にたえられなくなって）……何をしているんですか。
男１　なにって、バスを待ってるのさ、あんたもじゃないの。
男２　あぁ、そうだね、そう、バスを待ってる。僕も。
男１　だろ、行く先あんだろうがよ。
男２　……そうだね。
（男１つまらなさそうに、ひしげてきたチューリップをパンツから取り出し、見つめる。）
（男２、あ、へんなことをしている、やはり、無視しようと思い、本に顔をうずめる）
男１　なぁ、面白いことってなに？
男２　……、
男１　なぁ。
男２　……、
男１　なぁ、ひとひらの花びらが僕の心だと思うわけ。
男２　……、
男１　きもいとか思ってるんだろう、愚民め、ひとかけらの浪漫はないのか。
男２　……べつに、思ってないよ。（男１のピュア、気持ち悪さにいささか興味をもつ）
男１　ふん、
男１　風になびかせて、あ、きれいって思ってくれた

女に、その女のために咲いたわけ。

男２　……そいつは、めでたいね。

男１　……、おれはさ、女に袖にされたわけ、

男２　Oops！！

男１　本当に大事な女だったわけ。

男２　そうなんだ。

男１　うん。やっとみつけたって思ったわけ。はにかんだときの八重歯は僕のモンだと思ったね。ふわふわと歩くのは僕だけに捕まえてほしいと彼女は思ってたんだなと思ってたんだよ。だって、そうだろう、がつがつと歩く女は自分で歩いていける。男の力なんて借りない、私は、自立してます、私は、輝いています。みたいな女はふわふわ歩かないだろう、

（男２、本をたたんで）

男２　思い込みが激しいんじゃないか。

男１　激しいもんか、正論だ。

男２　激しいだろう、お前目線でものを斜めに見すぎているんじゃないか。

男１　なんだよ、俺に指図するのか。お前は、おんなというものをわかっていないんだよ、女はふわふわ歩くのは、男に守ってほしいからだ。不安定な生き物なんだよ。女は。なにかとすぐ不安になる。それがかわいい。かつかつあるく自信過剰な女はだいたい婚期をのがして、自立してます、自分のお給料で暮らしてて、趣味もあって、わたし輝いてますとか、ぶっこいてんだろう。こちとら、輝いています。みたいな、女興味ないんだってば。勝手にやってください。すごいですね、みたいなね。

男２　お前、やばいね。うん、やばいよ、いるんだね、いまどきこういう男。こういう男が正義感振りかざして政治家になんかなった日には日本は終わりだよ。一般市民の日本死ねとかそういった書き込みに対して、いぶしつけだの品性を疑うなど手前の世界でしかものごとを見れなくなることになんの違和感も持たなくなってないやつでよかったよ、うん。お前は、ただただ、老け込んだ２８歳でよかったね。

男１　けして日本を変えようとか、思うなよ。ただただ、黙って生きろよ。というか、あんまりそういう類のことを発言するのはやめろよ。

男２　はぁ、斜めに見てるとか、俺に日本を変えようとか思うなとか失礼なやつだな。

男１　だってそうじゃないか。

（男２、チューリップを切りきざむ）

男１　まぁ、たしかに俺は日本を変えよう、世の中をよくしようとかは考えない。それは、センセイらがやることだから。俺は与えられた命を全うするまでだと

思っているまでだ。
男２　それも、また違うかもしれないが、まぁ、お前の場合それでよしだ。誰にも迷惑をかけてくれるなよ。
男１　あぁ、お前はいちいち癇に障るな、なんでだよ、
男２　お前はいちいちアホだな。だから、女に袖にされたんじゃないのか、この短気。
男１　う。
（男１、しよしよのチューリップを愛おしそうになでる）
男２　ほら、しよしよじゃないか。
男１　さっきからなんだよ、お前は。お前だって見た感じしよしよじゃないか。いや、お前の方がしよしよだ。
男２　お前、お前のほうがしよしよじゃないか、肌も、髪も服もひしょげているじゃないか。
男１　なんだよ、さっき会ったばかりのお前に言われる筋合いはねぇよ。ひしょげているのは、お前だ。バカ。
男２　……なんだと、何て言ったお前。
男１　あ、バカだと言った。
男２　……、俺はバカという言葉が一番嫌いなんだ。表に出ろよ。
男１　なんだよ、バカ、バカにバカって言って何が悪い、バーカ。
男２　俺と同じ顔でバカって言うな、バカ。
（男２のこぶしが男１の頬を打つ）
男１　……、いってぇ。
（男１、ふっとばされて、頬を押さえる）
（バスがやってきて、停車、男３いつの間にか走ってやってきてバスに飛び乗る。バス発車。）
置いていかれる二人。
男２　わ、ごめん、つい。
男１　ついじゃねぇよ、
男２　バス行ったなぁ。
男１　お前のせいだからな。
男２　だってお前がバカとか言うから。
男１　たかがバカって言われたくらいで、殴るっていうか、キレる。ことはないだろう。
男２　や、だって親にさ、いや、いいわ。
男１　なんだよ、
男２　親に言われたんだよ。バカな男にだけはなってくれるなって。
男１　へぇ、とうちゃんにか。
男２　母親にだよ、うち、父親はいないから、
男１　へぇ。
男２　バカな男にだけはなってくれるなって、いつも言っていたよ、バカは一度つくと離れない虫なんだって。

男１　そうかな、バカは愛嬌だろう。ちょっと足りないくらいがちょうどいい。
男２　それは、お前だろう、俺は、無理だ、一度たりともバカって言われないようにしようと幼稚園のころに誓った。
男１　幼稚園て、早咲きだな。
男２　バカっていうレッテルを貼られたら最後、そいつはずっと……。
男１　お前、窮屈だな。
男２　窮屈なもんか。現に俺は、わりとエリートで来た。主席合格、生徒会長、新入社員あいさつ、昇格試験はいつもトップだ。こうやって老け込んでいるのも、人の何倍も努力した結果だ。名誉なことだ、
男１　めでてぇな。
男２　めでたくなんかないさ、現にこうやって同じ顔の僕に一番悲しい言葉を吐かれた。
男１　悪気はなかったんだ。
男２　悪気が無いことが一番いけないんだ。人は悪気があったら責めることができるが、そうじゃなかったら、責めようがないじゃないか。
男１　夕暮れがいつのまにか、黒に染まったなぁ。もうバスは来ないんじゃないか。
男２　お前は、ロマンチストなのか。いちいちかっこつけるな。
（バスが来る、）
男２　お前乗る？
男１　あ、ちょっとしょんべんしてくる。待ってて、
男２　え、まじで、
男１　我慢できん。すぐ済むから。
（バス、行ってしまう）
（バスを一本やり過ごす男２）
男２　行ってしまった。あいつのせいだな。次のに乗ろう。バス代支払わせよう。
（男１、戻ってくる）
男１　あぁ、すっきりした。
男２　それはよかった、
男１　さっきの話だが、
男２　え、
男１　俺はロマンチストではないよ。かっこはつけていないさ、にしても、お前こそ、やばいぞ。そんな考えでこの先ずっと生きていたら、
男２　あぁ、いいさ、いいんだ、母は優しい顔でバカな男にはなってくれるなっていった、悲しい顔で、泣いた顔でバカになってくれるなと言った。悲しいことばだ。それ以外の母の顔を僕は知らない。
男１　開き直るな、もっと可能性を信じろ。

男２　可能性ってお前は、そのふわふわした女がお前以外の男に股を開いてることも知らなかったんだろう、そんなめくらで人を見ることができないお前はなんなんだ。めくら。

男１　僕はそんなことをお前から聞きたいんじゃない、女はあばずれていた、悲しいことに。女のせいで、僕は、白髪が増えたし、痩せた。女というか、世間を信じられなくなった。眼をぎゅっとひらいたり、閉じたりしては、女がひらひらと僕の網膜や、まぶたにやきついて離れやしない、好きだよ、って言う。いろんな色の彼女が僕を誘惑する。そのうちに分からなくなってきた。僕を誘惑している女は、本当はやはり、僕のことを本当に好きなんじゃないかって。ほかの男の腕で抱かれているのは、僕へのあてつけであって、本当にすきなのはそいつではなくて、僕であって。妬いてほしいからだなって思えてきた。もっとぎゅっとやさしく包んであげたら、女はほそりと涙を流して、僕の胸をやさしく濡らすんじゃないかって。僕の胸毛はすこしだけ湿るだろう。

男２　お前重症だな、

男１　お前のほうが重症だ。いい年こいて母が、母がって、おこちゃまか、もう立派な大人だろう。あー、わかった。わかりましたよ、ブラザー。同じ顔の僕が言ってあげましょう、お前は幼稚園生のままお前の時間は止まっているんだ、お前はずっと幼稚園内をうろうろのたのたと歩いている自称２８歳に過ぎないんだ。だから、人の何倍もおなじところをぐるぐるぐるぐる。同じところをぐるぐる回っちゃ、同じ経験を毎日毎日繰り返せば、劣化もしましょう、老けましょう、どうですか、堂々巡りのおおよそ九千日は。

男２　……、

男１　人間新しい刺激がないと、老け込むんです。あらたな経験と知性が人間を成長させるのです、ブラザー、あなたは何も得ないところで、トップを走り続けて、かっこつけているだけで、何も変わっていないのでした。走り続けているフリをしているだけなのでした。あなや、残念。

男２　……黙って聞いていれば、お前はなんなんだ、お前の言っていることは変だ。お前は物事を斜めにしかみることの出来ない。ひねくれ者だからな。おんなじ顔の兄さんが教えてやる。酷く臆病な弟よ、たかが、女に袖にされたくらいで、幻覚が見えたり、世間が信じられなくなるなんて、女はお前のことなんて見ていない、女は何を考えているか分からない生き物だからな、だが、女は賢い、自分を見てくれている男にはなびきもしない、認められたい、見てほしいと羨望の眼差しを

欲しがるのが女だ、私だけを見てくれている、私だけを大事にしてくれる、そんな真実はないと女は知っているのさ、それをお前は蝶や花よと可愛がり、君のために咲きました、君は僕のために生まれてきたんだねとかぬかしているんのだろう、メルヘンなお花畑だこと。お前は、バカでよかったな。おおよそ、お前がもっているすべてをかけて守ってきた希望が打ち砕かれた。お前は灰色の世界にでも飛び込んだつもりだろう。死ぬほど人を好きになった、それがその女だ。女に袖にされた、死ぬほうが楽なんじゃないかとか考えているんだろう、髪も肌もぼろぼろになって、ひしょげているのはおまえのすべてを失っているに等しいからだろ。

男１　……、

男２　どうだ、違うのか。違うならいってみろ、

男１　……わからない。けど、僕のすべてをかけてもいいと思ったんだ、それはあってる。だから、捨てたんだ。でも、

男２　……。

（男１バス停の時刻表を見る）

男２　捨てられなかった。

男１　バスはもう来ない、今日は日曜日だから、さっきのが最後だった。

男２　……私は大人だ、いや、４歳、いや、大人だろう。

男１　ブラザー、大人だよ。

男２　ぐるりぐるりと回るのは。捨てるべきなのか。

（間）

男１　バスはもう来ない、何度も見送ったんだ。

男２　嘘だ。

男１　バスはもう来ない、あいつは行ってしまった、嘘だ。

男２　いや、本当。

男１　バスはもう来ない、

男２　いや、本当。

男１　時間は不可逆

男２　嘘だ、嘘だ。時間は不可逆、

男１　いや本当、

男　バスはもう来ない、

男２　嘘だ、

男１、２　バスはもう来ない、

男１、２　嘘だ。

男１、２　いや、本当。

男１、２　時間は不可逆。

男１　いや、嘘だ、

男２　いや、本当。

（遠くでバスのプーっという発車音）

おわり。